

ナラティブとコミュニケーション —質的方法をめぐる—

熊本大学文学部 佐藤哲彦

0. はじめに

今日は「ナラティブとコミュニケーション」と題しまして、私が用いている分析方法の観点から、最近ではいろいろな領域で流行しているナラティブの分析について考えてみたいと思います。どうぞよろしくお付き合いください。

まず最初に、簡単に自己紹介をさせていただきます。私の専門は犯罪社会学と医療社会学ということになっていまして、具体的には、覚醒剤などの薬物とそういった薬物に関する医学的知識、あるいは薬物使用者の発話の分析、さらには医師と患者のあいだの医療的コミュニケーションなどを研究しています。他にも放火の研究などもしています。

こういう話をしますと、そもそもなんで犯罪の研究をしている人が医療の研究をしているのかと思われるかもしれません。しかしながら、犯罪や疾病というのは、いわば「病理」と呼ばれる領域のことです。その意味で私は「病理」にまつわるさまざまなことを「自分なりのやり方で」研究しているということになると思います。

さて、いま私は、「自分なりのやり方で」といいましたが、実はこの「自分なりのやり方」という場合の「やり方」が、私の場合、一般的には「質的方法」といわれているものです。社会学の場合ですとこんにちでは統計が中心的な方法となっておりますが、その一方でそもそもこの学問の始まりのころから、インタビューをしたり観察をしたりといった方法が用いられてきました。私が自分の研究の中心においているのがこちらの方法で、なかでもとくにディスコースに着目した分析である「ディスコース分析」という方法を用いています。

1. ディスコースと言葉の動き

ではそもそも、ディスコース分析とは一体何なのか、という話を最初にしたいと思います。もちろん今日の話は、ナラティブと呼ばれるものと質的方法との関係の話ですから、それにかかわる範囲でこれを述べていきたいと思います。

そこでまずは「ディスコース」とは何か、ということになりますが、だいたい次のようなものだと考えていただければいいと思います。

「何らかの仕方でまとまって、出来事の特定のバージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等等」(注1)

このようになりますが、しかしながらこれだけではおそらく分かりにくいと思いますので具体的にいきますと、たとえばダム建設という出来事について考えてみたいと思います。

ダム建設というのは最近ではあまり評判が良くないですね。そういう意味では、「無駄遣いとしてのダム建設」というダム建設の見方があると思います。これにはたとえば、「ダム建設に投入される税金が非常に多く、しかしその対費用効果は疑問である」という形で、たとえば数字を出して述べられたりします。これがまず、ある特定のダム建設の姿です。実際のこのようなダム建設についてのディスコースを、われわれは新聞やテレビなどで見聞きすることができると思います。その場合、実際にそれは「無駄遣い」として描かれており、それがダム建設というものの現実を意味しています。ようするにダム建設は無駄だという現実があるということです。

一方、「防災と生産性向上手段としてのダム建設」というダム建設の見方があります。ダム建設は長い間このような見方によって支えられてきました。ようするに治水ということです。これには、たとえば「かけがえのない人命を守るためにダム建設が必要である」とかいう形で、やはり数字を出して述べられることと思います。これもまた、ある特定のダム建設という出来事の現実です。あるいは「周辺地域の農作物の生産性を上げることが必要である」という風に述べられるようなダム建設もあります。いずれもダム建設は有用なんだという現実があるということです。

これらは双方それぞれ、決して絵空事ではありません。絵空事というか、絵に描いた餅ではありませんし、単なる言葉で終わるものでもありません。これらは、同じようなダム建設という出来事が、その意味づけの仕方によって異なってしまうということの意味しています。というのは、たとえば「無駄遣い」と考えてダムを作らなければ、実際のところ結果的には「無駄遣い」であったという現実の上で、その後の現実が流れていくからです。あるいは逆に「防災」と考えてダムを作ることで結果的にはダムは「防災」のために作られたものとなり、そのような意味を帯びて、さらなる現実を作り上げることとなります。

ようするに、現実というのは実は単に「そこにあるもの」というわけではないということです。そうではなく、このように、それをどのように意味づけるのかということと切り離して考えることはできないわけです。そしてその場合、「どのように意味づけるのか」ということにかかわる一群の言葉などが「ディスコース」と呼ばれるものだと考えたいと思います。

さて、いきなりこういう話をしてもちょっと分かりづらいかもかもしれませんが、ここではこれくらいにしておきます。というのは、今日の話は、まさにそのように「ディスコースによって現実が立ち上がる」という点について述べるものでして、今日の話の全体が、ここでいう「ディスコースとは何か」ということと深くかかわっているからです。ですので、ここでは、ディスコースとは現実を立ち上げるものとして理解しておいてい

ただければいいと思います。

さて、そのようなディスコースを分析する「ディスコース分析」とはどのような分析なのかと申しますと、ひと言で言えば「言葉の動きに着目した分析」ということができます。

なんだそんなの私たちが普段やっていることだ、と思われたかもしれません。確かに、私たちは通常、人の話を聞いたり、自分で話をしたりして、その話に注目いたしますので、それと同じようにも思えるかもしれません。

ただしここでいう「言葉の動き」とは、その言葉を使う「人の動き」ではありません。ここがまずポイントです。私たちは通常、言葉の動きを追っているようで、実は人の動きを追っています。別の言い方をすると「人の心の動き」を追っているのです。

だからたとえば「こんな話をするとすることは、この人は今日は調子が悪いんだろう」とか、「こんな言い方をするなんて、ちょっと機嫌が悪いんじゃないか」という風に、「言葉の向こうに想像できる心」のほうを読もうとしてしまいがちです。もちろんそれがいけないとか間違っているとかいうのではなくて、私たちは日常的にはそのようにして話を聞いているということです。

しかしながらそれとは違って、ここでいう「言葉の動き」とは「言葉そのものが何をしているのか」ということです。つまり、言葉を使った人が何をしようとしているのか、とか、ある言葉で何を言おうとしているのか、ではなくて、言葉それ自体が何をしているのか、ということなのです。

ちょっと分かりづらいので、具体的に言ってみたいと思います。たとえば、次のような一文を考えてみてください。

「今日は寒い。」

これはきわめて簡単な文ですが、これを皆さんはどのように解釈しますか？

通常、これはある事柄を記述した文であると考えられます。つまり言い換えれば、「今日の気温は低めである」とか、そのような意味合いがあると考えられるわけです。まあ、当たり前ですね。

ところが、この文が、たとえば、冬のある日、友人がわざわざ自分の部屋を訪ねてきて、部屋に入るなりに「今日は寒い。」と言ったらどうでしょうか？そのとき、果たして「今日の気温は低めである」という意味にとるのでしょうか？

(例1)

A：今日は寒い。

B：ああ、今、お茶いれるよ。

A：ああ、悪いな。

果たしてここでの「今日は寒い。」の意味は、「今日の気温は低めである」ということでしょうか？

むしろ、ここでは「暖房を入れてくれたらうれしい」とか「何か暖かいものを出してくれたらうれしい」という意味にとるのではないのでしょうか？逆に考えれば分かることですが、「今日は寒い。」と言われて「そうだね」といってその友人に対して何もしてあげなければ、その人は「あまり気の利かない人」として扱われてしまうのではないのでしょうか？なぜなら、先ほど言いましたように、私たちは、言葉の向こうに心を想像して、その言葉の「真意」をつかもうとするからですし、そうするのが常識だからです。

あるいは、お母さんやお父さんが、子どもに向かってお遣いを頼んだときに、次のようなやり取りがあったとします。

(例2)

親：切れちゃったから、ちょっと醤油買ってきて。

子：今日は寒い。

親：じゃあ、刺身にソースつける？

これも同じですね。子どもは「今日の気温は低めである」と言っているのではありません。そうではなくて、「いやだ」と言っているわけです。だからこそ、親は「あなたが買いに行かないとしょうゆがないので」という意味で「じゃあ」という言葉を使っているわけです。

したがって、言葉の動き、ということからすると、この「今日は寒い。」という一見単純な文は、きわめて興味深い動きをしていることになります。

というのは、これは「今日の気温は低めである」という事柄を描いているわけではなくからです。そうではなくて、その文自体が、最初の例であれば「できたら暖かくしてほしい」というお願いや、二番目の例であれば「いやだ」という拒絶を行っているのです。

このような言葉がおこなう行為のことを「言語行為」とか「発話行為」と呼ぶことができます。専門的に言えば、このような文は「遂行的発話」とか「パフォーマンス」と呼ばれるものですが、そういう小難しいことは抜きにして、言語行為ということをもっと理解していただきたいと思います。つまり、言語それ自体がおこなう行為のことです。

さてそこでちょっと考えてほしいのですが、このように「言葉とはなんらかの行為をするものだ」といった場合に、われわれは、まず最初に、なんらかの事柄を描写する文があって、そのなかに例外的にそのような行為をおこなう文がある、と考えてしまいがちです。

しかしながらそうではなく、むしろ逆に「言葉はそもそもなんらかの行為をするもの

であって、それが結果的になんらかの事柄を描写する文のようになる」とするとどうでしょうか。これまでとはちょっと現実が違って見えてくるのではないのでしょうか。

でもそれは、実は特別なことではありません。というのは、私たちは、いつもはそのような作業を特別に意識しないでやっているからです。先ほどあげた例からも分かるように、私たちは通常、言葉が何をしているのかということについて、十分理解しているからこそ、常識的に振舞えるわけです。あるいは逆に、そういうものを常識と呼んでいるわけです。

したがってそのようなことの方を基本において、むしろなんらかの事柄を描写する、あるいは描き出すというのは、それに付随して生まれてくるものなのだと考えることも可能なのです。

ディスコース分析の根本にあるのは、このような考え方です。つまり「言葉とはそれ自体なんらかの行為をするものである」ということです。そしてそれをふまえた上で、その特徴をつかもうとします。したがって、言葉の動きに着目して、その言葉が何をしているのかということを考えるというのが、分析の基本作業になるわけです。

2. 意味と現実がうまれる

さて、ここまでで言葉それ自体が何かをする、ということはある程度理解していただけたのではないかと思います。

しかしながら、実はさらにやっかいなのは、言葉が何をしているのかということを考える場合であっても、私たちは、誰かが何かを言えば、それだけでその言葉が何かをしているということを考えてしまいがちだということです。

ちょっとまどろっこしいかもしれませんが、ある言葉や文が何をしているのかは、その言葉や文だけでは決まりません。実はこれがとても重要な点です。私たちは、相手が何を言ったのか、について着目するあまり、その意味がまるでその相手の言った言葉や文だけではっきりしていると考えてしまいがちです。

しかしながら実際にはそんなことはありません。たとえば、先ほどあげた最初の例を考えてみましょう。

(例1：既出)

A：今日は寒い。

B：ああ、今、お茶いれるよ。

A：ああ、悪いな。

ここで「今日は寒い。」は、先ほど言ったように、「できたら暖かくしてほしい」というお願いの意味をもっていることが分かります。しかしながら、実はそういった意味は、

ここでは A の発話だけで決まっているわけではありません。そうではなくて、実は B の発話が A の発話をそのように意味づけることによって、結果的にそうなっているのです。なぜなら、B の発話は A の発話がそのような意味合いであることによって、成立するからです。

そしてさらに、その B の意味づけをそれに続く A の発話が認めることによって、その意味づけが、結果的には正しいことになるわけです。この場合、「結果的には」正しいということがポイントです。

そのことは、このやり取りが、次のようになっていれば、分かると思います。

(例3)

A：今日は寒い。

B：ああ、今、お茶いれるよ。

A：え、いや、いいよ、それよりこの間の会議のことだけど。

ここではまず「今日は寒い。」が、「できたら暖かくしてほしい」というお願いであると B が解釈したことが示されています。

しかしながら、A は、そのように聞こえてしまったことを理解し、むしろそれを打ち消す作業をしているように見えます。その意味で、ここでは「今日は寒い。」は「できたら暖かくしてほしい」というお願いではなく、単なる挨拶として働いているということが分かります。

しかしそれは、あくまで「結果的に」わかることです。もしかしたら A は「できたら暖かくしてほしい」と思っていたのかもしれませんが、B に遠慮して、断ったのかもしれませんが、あるいはまた、そんなことは思ってもいなかったのかもしれませんが、それは分かりません。なぜなら心の中は見えないからです。

にもかかわらず、私たちは、(例1) の場合であれば、本人はそういう「意図」で「今日は寒い。」と言ったのだ、とか、あるいは(例3) の場合であれば、本人はその「意図」はなかったのだと、「結果からして」判断することになります。あるいはもう少しひねって、「意図」はあったけれども「遠慮」したのだとか、やはり「結果からして」判断することになります。

ここで重要なのは、以上のように、結果からさかのぼってそのように理解しているにもかかわらず、私たちはそもそもからそうであったと考えている、ということです。言い換えれば、結果があるのだから、原因として「意図」あるいはそれに類する何か——たとえば心——がそもそもそこにあるはずだ、という発想を用いているということになります。

しかしながら、この状況で「実際に起こっていること」は、結果的に「今日は寒い。」が「できたら暖かくしてほしい」というお願いであったということであり、あるいは結

果的に「今日は寒い。」は単なる挨拶であったということです。したがってたとえば、もし私たちが B の立場であるとすれば、私たちが A に対してどのように接するかによって、その結果が異なってくるかもしれないということになります。

おそらくここで反論が出てくることでしょう。つまり、そうは言っても、本人に聞けば分かることだ、と。なぜなら本人こそが本人の「意図」を分かるのであり、したがって本人がその「意図」があったといえ、その「意図」はあり、なければその「意図」はない、ということになるのだ、と。

しかし果たしてそうでしょうか。私たちは幸か不幸か嘘をつくことができます。したがって、本人に聞いてもそれは「嘘」かもしれません。そしてそれが「嘘」かどうかをまた聞かなくてはならないし、その答えがまた「嘘」かもしれないのです。

このようなことが起こるのは、この「嘘」を聞くという作業それ自体もまた、ひとつのコミュニケーションだからなのです。

にもかかわらず、私たちは普段の生活で、こんなことを考えたりしないで済みますね。どうしてでしょうか。それは本人の「意図」がどうであれ、結果的に起こった事柄からさかのぼって「意図」やその何か——心——を解釈しているからです。

しかしながら、繰り返しになりますが、そこで「実際に起こっていること」は、A が話して B がそれに対して話して、その B の話自体は A の話を意味づけるのであり、さらに B の話をそれに続く A が意味づけるという一連の「相互作用」というものです。そしてそのような相互作用によって、A の話の意味が現実的なものとなり、さらに B の話の意味も現実的なものとなるわけです。

つまり、現実というのは、実はこのような相互作用にもとづいて構成されたり編成されたりするものなのです。したがってこれは、たとえば「A の思っていること」や「A の見ている世界」があり、一方で「B の思っていること」や「B の見ている世界」がある、ということではありません。これまでの話から分かると思いますが、それは「結果的に」現れたものごとからさかのぼって、A の意図がある「はずだ」とする考え方と同じものです。その意味で、そのような考え方は、「実際に起きていること」に即して考えているわけではないといえるでしょう。むしろ、そういう風に考える常識にもとづいているものであって、考える方法としてはいささか不十分であると思われるわけです。

3. コミュニケーションの形

さて、長々と細かい話にお付き合いしていただきましたが、これまであえて基礎的で細かいことがらを述べてきたのは、このような相互作用が、たとえば診察や作業療法の場で起こっていることの仕組みのなかにあるものだからです。なかにあるというより、それらのコミュニケーションでは基本的な枠組みであるからです。

一方で、われわれはさまざまな場でコミュニケーションをおこない、そのコミュニケ

ーションに名前をつけています。たとえば、診察室でおこなわれるコミュニケーションは、一般的には「診察」と呼ばれるものです。あるいは、調査においておこなわれるコミュニケーションは、多くが「インタビュー」と呼ばれるものです。このように別々の名前がついてはいますが、今まで述べてきたような観点からすれば、これらはいずれもコミュニケーションの特定のパターンだといえます。

したがって、個々のコミュニケーションが別々のものにみえるとしたら、その基本構造が異なるのではなく、この基本構造になんらかの変更をきたすような力が働いているのだと考える必要があるわけです。それはたとえば、そのコミュニケーションが行われる「状況」などの、ある意味で、外的な要素です。それらの要素が、実は外的なものとしてではなく、いわば内的に作用することで、コミュニケーションの形が特定のものとなったりします。

たとえば次のような会話があります。

(例4)

A：どうです

B：あの一、ちょっと具合悪いです。朝、こことこがずーっと痛とうなってね。ちょっとお茶碗もったり、お箸もったりすると感覚がね、おかしくなるのです

A：ふん。どこらへんが

おそらくここではあえて断るまでもないでしょうが、これが診察であることは分かると思います。実際、Aは医師でBは患者であり、これは慢性病の診察場面です。具体的には膠原病です。

ただしここで興味深いことは、なぜ私たちはこれを見て診察だと分かるのかということの中にあります。

なぜこれが診察だと分かるのでしょうか。それは、このやり取りがある特定の形になっているからです。具体的に言えば、「どうです」と聞かれて、自分の体調のことでその問いに回答するという形です。当たり前といえば当たり前ですが、診察というやり取りの第一の特徴は、このように質問を意味づけて回答し、その回答が結果的に適切であったことが、さらなる回答によって明らかになる一連の相互作用の中で、その回答が「身体に関するもの」であるということです。

言い換えますと、最初の「どうです」という問いかけは、実は他の形でも答えることが可能なものです。たとえば、自分の経済状態や機嫌、あるいは身の回りの変化などです。それにもかかわらず、ここではBの発話が自ら進んで体調に関する答えについて述べています。そして、その答え方自体が適切であったことが、それに続くAの発話が、その答え自体を詳細に探索することによって、「結果的に」成立しているわけです。なぜなら、この答えの中身を詳細に検討することができるということは、その答え方そ

れ自体は適切だということの意味するからです。

なぜこんな細かいことを言っているかという、実はこれがとても重要なことだからです。というのは、ここでは、他にもありえたはずのやり取りが、他ならない特定の形になっていることが観察できるからです。つまり、このようなやり取りは、まさにこの状況が病院であり、診察室の中で白衣を着た医師と患者が向かい合った形で生じている特定の形だということなのです。

それは逆に言えば、このような形でのコミュニケーションが、私たちに、これがおこなわれた状況が診察であるということを知らせてくれる、ということになるわけです。

実際のところ、次のようなやり取りを考えてみれば、このことが分かると思います。

(例5)

C：最近どうです。

D：いや、かなり忙しくて。

C：年度末ですからね。

ここで行われているやり取りは、いわば世間話の形をとっています。そこには特定の形はありませんから、「どうです」がこのように自分の状況について説明したものでもかまわないでしょうし、あるいは体調について説明したものでもかまわないでしょう。

しかし先の(例4)とこの(例5)との対比が示しているのは、このようにどのようになってもありえたものが(例4)においては特定の形になっていることです。先の(例4)では、Bが「そうしたいから」とか、「そういう意図を持っていたから」とか、そういったことに由来するのではなく、まさにそれが診察という「特定の状況」だからだということになります。

つまり、私たちがコミュニケーションを観察する場合、「その人が何を言いたいのか」などといった「意図」、あるいはその人の心や調子などといった見えない部分をあらかじめ想定しながら観察するのではなく、むしろ、「そこで何がおきているのか」という意味で「言葉」に着目するとともに、「それがどういう場で行われたものであるのか」という「状況」にも着目する必要があるということなのです。そして学校や医療機関などの制度の中で言葉を使うということは、実は意図とは関係なく、その状況によって作り出されたり、あるいは逆にその言葉の使い方によって、その状況自体を映し出すようになっているわけです。

4. ナラティブを考える

さて、ここでようやく本題であるナラティブについて多少なりとも考えることができるようになりました。ちょっと前置きが長すぎたかもしれませんが、ご容赦ください。

ナラティブについては、最近では、ナラティブ・ベイスド・メディシン (NBM) といったものが比較的流行し、あるいは翻訳などがされて、多くの方がご存知だと思います。ナラティブというのは、日本語にすれば「物語」ということになるでしょう。NBMはこの「物語」という考え方を、医療に導入したことで有名です。

そこでNBMの要点を考えますと、簡単に言えば、次のようになると思います。ただしここでは、「患者」という言葉を用いません。より一般的な言葉である「クライアント」という言葉を使用しています。

- | | |
|---|-------|
| <ul style="list-style-type: none">①「クライアントの状態」と「その状態に対するクライアントの対処行動」を、クライアントのより大きな物語の中で展開する「ナラティブ」とみなす。②クライアントを主体とみなす。③ナラティブの複数性を認める。④単一の因果連関を想定しない。⑤対話を重視する。 | (注 2) |
|---|-------|

このような NBM といったアプローチは、これまで医療に比較的欠けていたとされているクライアントを尊重する態度を提案するものとして、最近では非常に有望視されているように思います。言ってみれば、「医師中心性 (doctor centeredness) から「クライアント中心性 (client centeredness)」への変化です。私が知っている限りでは、とくに総合診療を主とする医師の間で、これについてとりあえず一通りは勉強しておく必要があるだろうと言われています。

実際のところ、これらの要点は、これまで医療が比較的軽視してきた「患者自身のことから」について着目し、それを重視していくことでよりよい医療を探るものとしては、とても評価できるものだと思います。とはいっても、これを見ると分かるのは、この多くは当たり前なことなので、これをわざわざ唱えなくてはいけないというところに、ある種の問題を感じないわけではありませんが、まあそれはこの際置いておくことにしましょう。

そのような感想はともかく、しかしながら、相互作用やコミュニケーションの観点から考えると、ここで述べられている限りでの NBM というアプローチを提唱する研究や実践は、きわめて問題の多いアプローチであることが分かります。

すでに述べてきたように、言葉や文章の意味は、その言葉や文章だけでは決まりません。それに続いてくる、その言葉や文章を意味づける次の言葉や文章が、それを決めていくことになるわけです。それはすなわち、

- 1) 言葉や文章の意味は一連の流れの中でこそ理解できる。

2) 双方が協力して意味を作り上げる。

ということです。これは実は二つともほぼ同じようなことを言っていることが分かります。このことを忘れると、たとえば、クライアントにはクライアントの世界があり、医療者には医療者の世界がある、といった、まるで別々の世界があるかのような誤解を生じることになります。先の NBM の理解には、まさにそのような誤解が含まれていることが分かります。

ではなぜそのような誤解が生じたのでしょうか。

おそらくそれはひとつには、主観と客観という、昔ながらの図式的理解で、ものごとを理解しようとしているからだだと思います。しかし実はそこで起こっていることは、主観とか客観とかいう考えとは関係ありません。実際に起こっているのですから、少なくとも主観という見えないものは関係ないのです。もし主観が関係するのでしたら、それはちゃんと口に出すなりしてお互いに見えているはずですし、それでしたら、客観も主観もなく、実際に起こっていることに着目すればいいわけですから。

そしてもうひとつは、それと関連していますが、ナラティブという考え方それ自体がどうしてこの時代、この時期に流行してきたのかということに対して、洞察を欠いているからだだと思います。

これについてごく簡単に述べておきますと、1970 年代の終わりから 80 年代の初めにかけて、思想史や社会科学において、言語論的転回（ターン）と呼ばれる現象が生じました。そこではそれまで前提として自明視されてきた、「言語と言語外の現実という対比」あるいは「言説と客観的構造という対比」が問題視され、たとえば「テキストの外部はない」などとも言われました。これは、われわれの知りうるのはいずれにしてもなんらかの形でテキストであって、その外部を前提にするのではなく、むしろテキストこそが現実であり分析の対象なのだとするスローガンです。

このような言語論的転回とほぼ同時期に、ナラティブも関心を集め始めました。たとえば、著名な哲学者や社会学者などが執筆する『クリティカル・インクワイアリー』という雑誌がありますが、これは 1979 年にシカゴ大学で開催されたシンポジウムを受けて、1980 年にナラティブに関する特集を組んでいます。そこでは言語論的転回とナラティブへの関心が、「世界を理解する方法」として結びついていることが示されています。

そして 90 年代以降、社会学やそれに類する領域ではナラティブ的転回（ターン）というものが語られ始めました。ライフヒストリーへの関心やストーリーの社会学、物語論の流行などがそれを示しています。いわば、言語活動への関心といったものが、あらゆる領域へと広がりつつあるということだと思います。

しかしながら問題は、このような言語活動への関心が、そもそもの思想的潮流の要請から切り離されて、話を聞けばそれで済むと思われてしまっていることです。言い方を

換えると、聞いた話をこれまでの方法でまとめたりすれば、それでナラティブの研究だと思っている人があまりに多いということです。

しかしながら、このような言語的活動の探究への傾斜といったものは、私たちが現実や世界を認識するのにさいして言語や物語を用いており、しかもそれを用いざるを得ないということに端を発しているのです。

つまり、客観的な世界というものがまずあって、それに対してそれぞれの主観がある、ということではありません。私たちはそもそもから言語やその集積体である物語によって世界のありようを認識するわけです。そうであれば、それぞれの主観的世界や物語世界があって、それがまるで横に並んでいるかのように考えるのは、おそらく間違っているでしょう。私たちは、同じような言語的部品を使いながら、世界のありようを認識し組み立てているのであって、その意味で「同じように」（同じかどうかは確認できませんが）世界を認識することが可能になっているということになるわけです。

そしてより重要なのは、それはそもそもから決まったものではないということです。この「決まったものではない」というのは、実は二通りの意味合いがあります。ひとつは、当然のことながら「可変的」だということです。昨日語った物語と明日語る物語が同一のものであるという保証はありませんし、あるいは同一であるということは実はあまりありません。それが同一のものであるとしたら、それはとくにそのように念入りに作りこまれているからだと考えられます。

たとえば、断酒会やアルコールリック・アノニマス（AA）での人々の語りは、時間を経るごとに洗練されていきます。それこそ最初に会に参加した時点では、なかなか自分のそれまでの飲酒行動を否定的に扱うことはできません。むしろ、たまたま偶然が重なって酒をやめられなかったとか、仕事上のストレスで酒がやめられなかった、などとして自分の行動それ自体の正当性を確保しようとしみます。ところが長い間参加するにつれて、自分の過去の飲酒行動が間違っていたこと、をきわめて物語的に、つまり起承転結などの特定の構造をもったものへと変化させていきます。さらにはそれが繰り返されていくことで洗練されていきます。

あるいはカウンセリングというのは、袋小路に陥ってしまった物語の作成を、カウンセラーがよりよいと思われる方向に手助けしていく作業だといえます。これは物語が可変的であるがゆえに可能となっているのです。

これらのことが示しているのは、このように作りこまなければ、物語などというものは、確固とした形をもっているものではないということです。

したがって、まさにそこでおこなうコミュニケーションによって、どのようにも変わる可能性があります。つまり、そもそもある特定の物語があってそれを聞き出すという考え方は非常に通俗的であってちょっとおかしい。それはまるで、取り調べの刑事さんがあの手この手で供述を聞きだそうという態度のようではないでしょうか。少なくともコミュニケーションという観点からすると、その人がそもそもから特定の物語をもって

いると考えるのは、おかしいと言わざるを得ないのです。

しかしもうひとつ、この「決まったものではない」というのは重要な意味を持っています。それは、「状況によって変わる」ということです。そしてこの意味は見過ごされがちです。

すでに見たように、コミュニケーションにおける言葉や文章の意味は、実はそこでお互いがどのようなやり取りをするかによって、変わる可能性が大いにあります。そしてそれと同時に、そのコミュニケーションがどのような状況でなされるのかによっても大きく異なってきます。

したがって、あるナラティブがある状況で得られたからといって、それが果たして「その人に属するもの」だとするのは、考えものです。もちろん、そのような言語的部品すなわち言葉の使い方それ自体は、もちろん知っていたのかもしれませんが、しかしながら、それが特定の意味を持つようになるのは、まさに相手がどのようにそれに応答するかということと切り離して考えることはできないわけです。

言い換えれば、「同じよう」な話をした二人の人がいるとしても、それが本当に「同じよう」な意味であるかどうかは、それが話された状況、そしてそこでおこなわれたコミュニケーションと切り離して考えることはできません。なぜなら、それが「同じよう」なのは、もしかしたら、その人たちが同じような経験をしたりしたからではなく、話す状況が「同じよう」であるからかもしれないからです。あるいは、「同じよう」に見えて、実はその場の相互作用の文脈においてみたら、まったく違った意味合いを持ったものかもしれないからです。

これを多少具体的にいいますと、医療もそうですし作業療法なども、おそらくは回復にいたるプログラムというのがあると思います。そこで私たちは、クライアントの発話や態度を、それ自体として意味のあるものとして考えてしまいがちです。そしてその意味とプログラムとの関係から、クライアントがプログラムのどの位置にあるのか、次のステップに進むにはどれをクリアしないといけないのか、と考えます。

しかしながら、これはまさにそこが診察やケアなどの制度的な状況にあるということや、クライアントが私たちとコミュニケーションしている状況であるということのを忘れてしまっているということです。そして私たちは、そこでおこなわれていることが、「クライアント自身に属するもの」であると考えてしまいがちなのです。

これは別の言い方をすれば、クライアントがプログラム上、次のステップに進めるかどうかということが、プログラムや個々の状況によって拘束されているのにもかかわらず、それとは切り離されて独立に存在する「本人の状態」とされてしまうということを意味します。それはきわめて人工的で制度的な状況であるのにもかかわらず、そのようなある種の不自然さを忘れて、そのようにできないのがクライアントの問題として現れてきてしまうということを意味しているのです。

このようなことを避けるためには、そこで私たちは一歩引いて、そこで「実際に起き

ていること」を考える必要があるのではないかとされるのです。

5. 考えるということ

つまり、ナラティブを考えるということは、ナラティブを「使って」考えるということではありません。そうではなく、ナラティブをそれ自体として考えるということの意味しています。言い方を換えると、ナラティブをコミュニケーションの一部分を構成するものとして考えるということです。

したがって、たとえば、インタビューによって得られた相手のナラティブを、それだけで分析したり考えることはできません。当然のことながら、そこにはインタビュアーがおりますし、インタビュアーとのコミュニケーションとして考える必要があります。インタビュアーは特権的で客観的な観察者ではありません。その状況のコミュニケーションに参加して、そこで起こっている現実を、インタビューの対象者とともに協働で作り上げているのです。

そしてさらにそこで得られたインタビューを、これはとてもよくあることなのですが、ひとつながりのストーリーになるように、バラバラにして並び替えたりしてはいけないこととなります。それは状況において、その流れの中で意味を帯びるものだからです。したがってバラバラにして並び替えたりしたら、それはすでにナラティブではありません。それは研究する人の側が作り上げた人工物なのです。それはそこで起こったことでもありませんし、インタビューの対象者の中にあつたものでもないのです。それが意味を帯びるとしたら、まさにそれを並び替えるという状況において意味を帯びることになるわけです。しかしながら、残念なことに、そのようなバラバラにするような作業はいまだ一般的であるように思われます。

おそらくここで考えておくべきことは、一般的にいわれているような、量的研究という質的研究の違いということでしょう。なぜなら、その違いを十分に了解していないからこそ、そのような作業が行われてしまうように思われるからです。

量的研究とは、対象に対する全体的な様態の把握をおこなうもので、一般的には統計などを用いた研究だと理解されています。一方で質的研究とは、量的研究では把握できない個々の現実を把握するものであり、一般的にはインタビューなどを用いた研究だと理解されています。

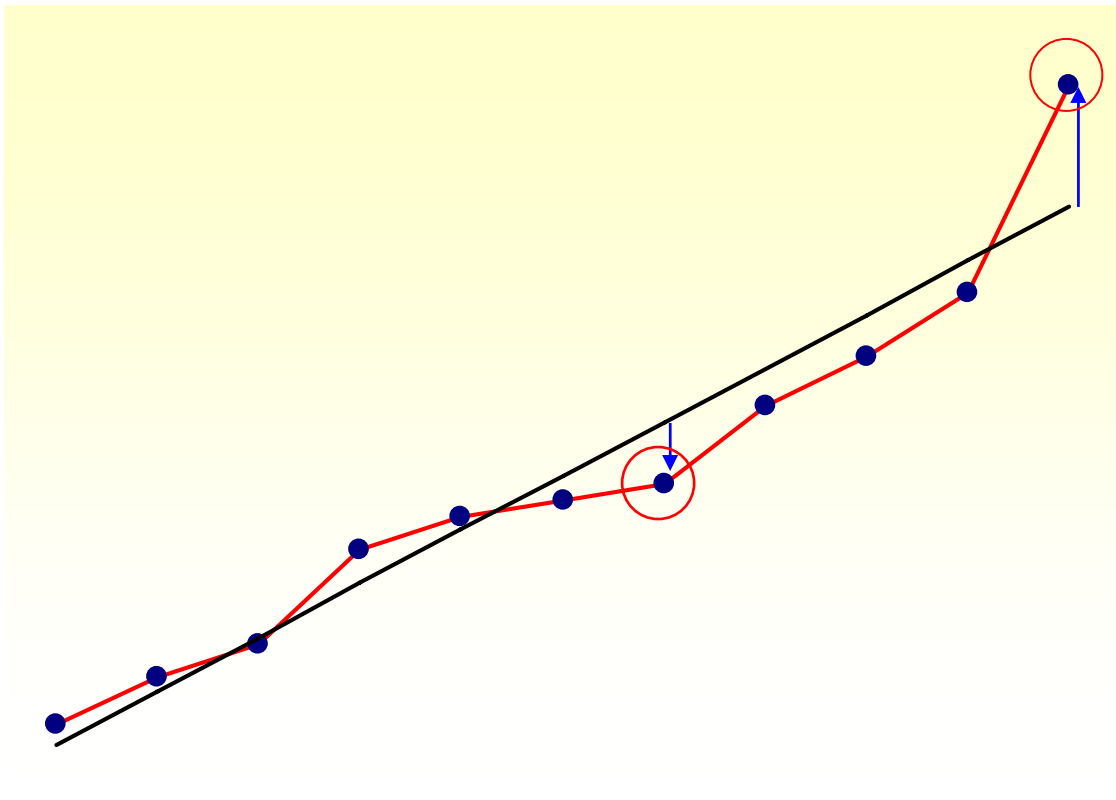
しかしながら、実はこのような区別はあまり意味のあるものではありません。とくに重要なのは、インタビューや語りを集めれば質的研究であるというわけではないからです。むしろ、それらをデータとして、どのように分析に用いるのが重要になってきます。

多少具体的に言いますと、質的研究のための方法論として、医療でもよく言及されるのが、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）です。これは、社会学で発達し

てきた方法として、アンセルム・ストラウスなどのシンボリック相互作用論と呼ばれる社会学の研究手法の研究者が中心となって発達させました。そしてこれはそもそも、分析的帰納というやはり社会学における相互作用の研究者が発達させたものから発展しました。これは図式的に言えば、仮説、検証、仮説、検証、仮説というステップを踏んで、仮説を練り上げていく方法で、実はこれは、一般的な科学的方法である仮説演繹法なのです。

つまり、これは、量的研究が最初から量で勝負するところを、ケースを積み上げるという手順によって代替する方法であり、実は量的方法と変わらない仮説検証方法なのです。

一方、ここでいうディスコース分析に代表される方法とは、そのような仮説を練り上げていく方法ではありません。そうではなく、個々の現実のあらわれ方を研究する方法なのです。これを図式化してみると次のようになると思います。



これは一般的にいう量的研究と質的研究が、どのような意味を持っているのか、ということを図式化したものです。量的研究とは、一般的には指標化を行い、その指標がどのような量的変化をもっているのかをあらわしています。それが典型的には統計という考え方で、たとえばそれはケース数が増えれば増えるほど、正規分布をとるといふ仮説に基づいて分析をおこないます。もちろんそこまでのケース研究は通常おこなわれず、ケース数が増えた場合に、近似曲線を描くことで統計的収斂といったものが算出されま

す。そして、これが重要なのですが、統計も解釈によって意味づけられることで、われわれに理解可能なものとなります。ひとつのストーリーとして成立するということです。

一方、一般的に質的研究と呼ばれているものも、実はそれとそれほど変わりません。ただしケースが少ないので、それぞれの値それ自体が比較的重要視されます。この折れ線グラフでいう、個々のマーカーです。

それは別に指標化しなくても同じことです。対象に関するストーリーを採取して、それを記録する。その上で、それぞれのストーリーの共通や差異をあげます。どのようにしてあげるかという、「一般的カテゴリー」による記述です。具体的に言えば、AからBへの変化において、「悲しみ」というカテゴリーがどれくらい増えたか、とか、「喜び」というカテゴリーがどれくらい増えたか、など、もちろん数値化はしませんが、一般的カテゴリーを用いることで、同じ作業をしているのです。

分かりづらいかもかもしれませんので、言い換えますと、悲しみとか喜びとか、そういったものを考える際に、そのような悲しみとか喜びとか、あるいはそれらの受容でもいいのですが、そういったものをそのままその状況において考えているのではない、ということです。個々のケースを記述することは、一見して個々のケース自体を重要視しているように見えます。しかしながら、すでに悲しみとか喜びとか、そういった一般化されたカテゴリーを用いて記述することで、個々のケースの向こう側に、すでに一般的なケースを見ているのです。一般的なケースを見ているからこそ、その悲しみや喜びがどのようなものであるのか、どの程度のものであるのかを理解可能となるのです。

したがって、質的研究のパターンとしては代表的には二つ、ケース数を積み重ねることで、量的方法に接近していく仮説演繹法となるか、あるいはそれができないのであれば、一般的カテゴリーを用いて記述することで、一般的ケースとの差異を論じるということになります。この図では青い矢印がそうです。通常、この青い矢印がどのようにして生じ、対処されているのかを論じます。

そしてそこでもまたストーリー化という考え方が主流になっているように思われます。つまり、そこにある差異が何によって生じ、そしてそれに対してどのような対処をおこなうことによってその差異を解決していったのか、などという因果図式を基礎にしたストーリー化です。しかしながら、実はここでもストーリー化は統計的収斂を目指しています。つまり、ここでは個々のストーリーがあって、それで完結しているわけではありません。そうではなくて、ストーリー化することはまたそれをより一般に近づけていく作業なのです。図で見るのであれば、青い矢印の特徴を記述することで、実は青い矢印それ自体の統計的収斂をおこなうことになるのです。言い方を換えれば、パターンの析出がおこなわれていくわけです。Aという状況にあるときにはaという差異が生まれる、Bという状況にあるときにはbという差異が生まれる、という形ですね。つまり統計をストーリーとして理解するのと同様、このような差異もまたストーリーとして理解しようとするのが、そのような研究の特徴となるわけです。注意深くそれらの研究を讀

み解くと分かるのですが、これは研究が研究を参照するという仕組みによって徐々に達成されていくものだと考えられます。

もちろん、これはそれを批判しているのではなくて、そういう性質を持っているということを言っているにすぎません。だから実は、いわゆる量的研究とそう変わりはありません。量的研究であれば、一度で済む仮説の検証という作業を、個々のケースの積み重ねの上に成立させる作業なのです。

一方、それぞれの現実そのものがどのようにして成立しているのか、どのようにして生じているのかを研究するのが、ディスコース分析や会話分析などの研究です。それは先の図でマーカーを囲む赤い丸の部分が指し示しているところでもあります。このような違いがあることを理解しておく必要があるでしょう。

つまり一口にナラティブの研究といっても、それらが同じものというわけではありません。それらを採取してどのように分析するのかによって、ずいぶんと違いが出てくるものということになります。ただしいずれにしても、コミュニケーションという観点から考えた場合、それをバラバラにして組み立て直すということは、少なくとも先に上げた個々のマーカーの研究になるわけではないということです。個々のマーカーは個々の状況に基礎づけられているわけですから、もしそれらと一般的傾向性との差異を論じるのであれば、それらが同じような編成になるということ自体をバラバラにせずに確認する必要があるわけです。それをバラバラにして組み立て直すということは、そこで「実際に起こっていること」を注意深く見て、そこにあるそれぞれの現実を抽出するのではなく、それを省いて一気にストーリー化に持っていくという作業ということになります。統計的収斂を焦ってしまっているということかもしれません。

では、それぞれの現実がどのようにして生まれるのかということ进行研究するには、どのようにしたらいいのか。

それをここで簡単に説明することは、申し訳ありませんが、なかなか難しい。それにはおそらく多少なりとも専門的な訓練がいりますし、加えてある種の慣れというものが必要です。それはいわば常識的な見方を覆すような訓練です。

ただしせつかくでするのでその一端を言いますと、まず大事なものは、録音したり録画したりすることだと思います。実はディスコース分析や、その基礎となっている会話分析といった方法は、録音技術が一般化してはじめて可能になった方法なのです。

それまで私たちはノートをとったり、記憶をもとにして、対象の言葉を記録してきました。しかしながらその問題点は、これまでの話から明らかですね、ようするに、自分の言葉は書いていないのです。それゆえ、相手の言葉しか出てこないのです。それに対して録音や録画をおこなうということは、自分がどうしゃべったのか、自分がどう対応したのか、否が応でも記録されることになります。そしてそれを考えることができるようになるのです。

実際、私もイギリスでディスコース分析の訓練を積んだときには、誰かがテープを持

ってきて、それを聞いて分析するデータ・セッションと呼ばれるものに参加しておりますし、私の大学院のゼミでも同じように、大学院生が自分が調査してきたものをMDなどで録音してきて、それを聞きながら一緒に分析します。

もちろん分析には特定の道具立てがいります。大学院生たちは、いわばそれを習いに来ているのです。実は彼らの多くは、現役の看護師であったり助産師であったり、以前は作業療法士の大学院生もおりました。彼らはそのような訓練を積みながら、自分たちのやっていることの意味を考えています。もちろんその際の分析はまだまだであることが多いのですが。

しかしながら分析がまだまだであるかどうかということは、実はそれほど問題にならないとも思ったりします。もちろん専門的に考える際には、たとえばジャーナルに投稿された論文には「分析が不十分だ」というコメントをつけて送り返したりもしますが、まあそれは言ってみれば、お家の事情というものです。

それよりもむしろ大事なものは、録音を聞きながら、あるいはトランスクリプトと呼ばれる書き起こされたものを見ながら、自分も含めたコミュニケーション全体を考えるとということそれ自体ではないかと思っています。そうすることで、自分がどのように語っているのか、相手はどのように話しているのかをより冷静に眺めることができるようになります。私が知っているかぎりですが、ディスコース分析の研究者の多くは、実はその意味で自分の言葉に非常に敏感です。もちろん、自分がしゃべりながらそれを同時に分析することは、論理的に言って不可能です。しかしながら経験的に、言葉がおこなう行為——言語行為——にとっても敏感になるのです。

おそらくこういうことが、クライアントに向かい合う仕事にとっては重要なのではないかと思います。私自身も学生に向かい合うときには、やはり言葉を大切にしようとしています。それは単なる情報の伝達をおこなうものではなく、それ自体が動いているものだからです。録音や録画することで、それが動いている様子が観察可能になります。それが動いていることが実感できますし、その実感こそがとても大事な意味を持つてるように思われるのです。

そしてそのように言葉に対して敏感になってはじめて、そこでおこなわれるコミュニケーションを考えることができるようになると思います。そして「考える」ということは、実は答えを出すことではありません。もう時間もないので申し上げられませんが、「考える」ということは、実は自分の中でコミュニケーションを作り出す作業です。私たちは言葉を使って考えているのですから。

だから何かをできるだけそのまま記録し、それを聞いたり見たりするという作業は、私たちに何かを考えさせますし、おそらくはそうすることが、コミュニケーションに関係する仕事についている私たちにとってはとても重要だと思われるのです。

(了)

注(1) ヴィヴィアン・バー『社会的構築主義への招待』川島書店、74頁

注(2) 斎藤清二「Narrative-Based Medicine とは」JIM, 13(10), 834-838, 2003年